

ルシャナの仏国土 一

第一章 ルシャナ

一. 惑星ルシア

この物語はプレアデス星団の中ほどにあるサルナート太陽系・第五惑星ルシアでの出来事である。

この星での人類は、火と剣と弓の次に水力発電と風力発電を発明し、文明は発展していった。

しかし、文明が発展していくにしたがって、村同士の縄張り争いから、民族単位での勢力争いに戦乱も拡大していった。七つある大陸の中でも幾つもの国に分かれ、それぞれが統一されるまで、二千年ほどの時を要した。

惑星市民条約機関が設立され、機能し始めたのは、ようやく統一されたばかりの各大陸それぞれの統一国家の施政者たちのあいだに平和を求める機運が高まった頃であった。世界が平和でなければ、人々に幸せは訪れない。

具体的には、惑星市民条約機関は、世界平和を目的として、どの国のどの国民も全て平等に扱うものであった。各々に施政者を「皇帝」に指定し、彼らの施政は常に各国の市民議会の承認を受けなければならない、と定めた。また、剣と炎以外の武器を開発・使用・運搬することを例外なき禁止事項とした。

大陸間にある海については、近隣のどの国にも属さず、惑星市民条約機関の直轄領と定め、治安は市民機関直属の海洋警察および海洋裁判所が担う。

ここまでの決定が為されるまでには、実に百年の時を要したが、その決定は惑星全体で完全履行されるに至った。こうして、惑星ルシア全体に、恒久的な平和が訪れたのである。

ルシャナと名乗る人物が、世の人の「苦」を滅する教えを説いていたことも、この機構設立の基礎となった。宇宙のすべての生命体はそもそも平等であり、人はその心によって本当の幸せになれると説いた彼の言葉は、多くの人々の共感を得て、広く広められることとなった。

彼の死から千年あまりが経った今日、人々は自らの星をこう呼ぶ・・・「ルシャナの仏国土」と。

二. ナーデルの騎兵部隊

その頃、世界はまだ各大陸内が数力国にまでしかまとまっておらず、七大陸の一つ、カルタナ大陸においても、ナーデル・ラオプ・オープストの三ヶ国が突出して覇権を争っていた。

ナーデルの騎兵部隊の団長ジークヴァルト・ペフラインとその妻クリスティーナにとって次男となる一人の男子が産まれた。名前はヴォルフ。このヴォルフこそが、後世になってルシャナと呼ばれることになるのだが、ある時まではヴォルフと言う名の一介の騎馬兵であった。



騎兵部隊は、部隊長のジークヴァルトとその嫡男ディートリヒが主戦力で、ヴォルフはいつもその補助的な存在に過ぎなかったし、ヴォルフ自身もそれが当たり前だと思っていた。

ヴォルフもまた幼くして武術と騎馬部隊に見合う礼儀作法を習い、十五歳になると一人前の兵士として戦場へと出て戦った。

しかし彼は戦場ではいつも負けそうになって味方に助けられることが多かった。味方が自分をかばって敵を斬った時、敵の返り血を浴びることもあった。そんなとき母は我が子の怪我を疑い、それが違うとわかると安堵の言葉と抱擁を彼に与えたものだ。

やがて彼は戦うことよりも、味方のために防護壁を組む才能のほうに長けていることが知られたため、防護壁造営を専門とするようになった。そうして、彼は必然的に闘いを最後方から全体的に見ることが多くなったのである。

毎日、仲間たちの幾人かが傷つき、時には死んで帰ってくる。死者の家族となった者たちは、嘆き悲しみながらその遺体を葬るが、翌日にはまた戦いに出て、人を傷つけたり殺したりするのだ。その敵にも家族があるとは考えずに……。

またある時などは、戦いに倒れた敵兵のそばに駆け寄り、嘆き悲しむもう一人の女性兵士を騎兵部隊の一人が切り捨て、そのまま駆け抜けて行った。

そのような光景を、ヴォルフは後方の防護壁のところから深い悲しみを伴って見続けていた。

ヴォルフは、父親に問うた。

「父上、私たちは何故毎日戦うのでしょうか？多くの仲間たちを失って悲しんでも、戦い続ける。悲しさが生むばかりではありませんか。」

それに、敵となる人たちにも家族がある。戦い続けることは、さらに悲しみを増すばかりではありませんか。」

父親の団長は言った。

「確かにお前が言う通りだ。だが、我々は戦うことで身を立てて生きているし、我々が戦わずとも、結局は他の誰かが戦うことになる。中には、わざと残忍な殺し方をして楽しむような輩もいると聞く。それを考えれば、我々のような誇り高き正規の部隊が戦うほうが、敵となった者たちのためにも良いであろう。我々は、犠牲を、悲しみを払って、その対価を得ているのだ。」

「しかし父上、世の中には戦いをしなくともよい生き方はないのですか？生きている者は皆やがては死にますが、殺されて死ぬより他に、天寿を全うして死ぬほうが、理にかなっているように思われます。」

「ヴォルフ、お前はやはり戦いには向いていない。防護壁に専しておけ。」

父親は、そのまま背中を向けて眠ってしまった。

それから、ヴォルフはずっと考え続けた。世の中には悲しみ苦しみが溢れている。今のままでよいのか。誰も傷つかずに、誰も悲しまずに生きていける方法は本当にないのだろうか。……

ヴォルフ十八歳の時、騎馬部隊が次の戦場へと移動していく途中で、小さな泉で水を補給しながら一休みすることになった。その時、旅人らしき人物が森の中を一人静かに歩いてくるのに出くわした。

彼は何も持たず一人でただ歩いていただけだったので、兵たちは誰も彼に注意を向けなかったが、ヴォルフだけは違っていた。

(この人は戦ってはいない……。これといった荷物もないようだが、一体どうやって生きているのだろうか？)



旅人も、やはりその泉で喉の渴きを潤し、水筒に水を満たして、顔や手をすすいでから、そこに座って休んでいた。ヴォルフは兜をぬぎ片膝をついて、おずおずと声をかけた。

「失礼します。私は、騎兵部隊の者で、ヴォルフと言います。旅人よ、少しお尋ねしてよろしいでしょうか？」

旅人は、ヴォルフを見た。

「青年よ、このような老身に何を尋ねることがあろう。だが、話をしたいならば、まず座りなさい。そのままでは話をするにも落ち着かなかろう。」

「はい。初対面の貴方と話をすることができるかどうかわからなかったので、座るのは遠慮したのですが、重ね重ね失礼いたしました。それでは座らせていただきます。」

ヴォルフは胡座をかいて座った。カルタナ大陸の当時の文化では、他の人物のそばに座るということは、ただ休むというだけではなく、共に語り合ったり食事をしたりすることを意味する。それ故ヴォルフは、いきなり隣に座ることを遠慮したのである。

「貴方が私に遠慮してくれたのは分かっているが、それで良い。それで、何を話したいのかな？」

老身たる旅人は言った。目の前に座った青年は、近づいて見るほどに、澄んだ良い目をしている。

「はい。…貴方は、武器も荷物も持たず一人で生きておられるご様子。一体どうやって暮らされているのかと、不思議に思って声をかけたのです。」

「青年よ、逆に問う。何故不思議に思うのかね？私は普通に生きて歩いてきただけなのだが。」

「私は物心ついた時には、すでに武器を持って戦う練習をして来ました。毎日のように怪我人や死人が出て、一族は戦い続けます。それを悲しく思いながら、日々を過ごしているのです。」

しかし、他の生き方を私は知らない。それで、何も持たずに生きている貴方に生き方を伺いたくて参りました。」

老人は答えた。

「私は、特に何も思わずに生きてきただけなのだが、貴方はそういう意味では賢いのかも知れぬ。戦いが当たり前の中にあって、それを悲しみとを感じる心を持つとは。」

世の中には、畑を耕す者たちや、家畜を飼って乳を搾り、肉を捌いて食べ物として分け与える者、竹を編んで籠をこしらえる者、それを売る者、他人のために住まいを建てて報酬を得る者、他の者が作った物を買って差額で生活している者たちもいる。或いは、人々の長(おさ)となり、束ねる者たちもいる。貴方はまだお若い。そういった様々な生き方を注意深く見て学ばれるがよろしかろう。

また、青年よ、時には何も持たず、何も為さず、何も考えずに、ただ座るだけの時を過ごしてみたまえ。きっと何かが変わるはずだ。」

老人は、それだけ言うと、その場を立った。

三. 最強の盾

ヴォルフたちが仕えるナーデルのミヒヤエル国王には、五人の子がいた。当時は戦争や病のために子供が亡くなってしまうことが多かったので、血筋を絶やさぬよう、支配者層ほど敢えて子を多くしていたのである。

そのうちの一人、フレデリック王子は、兄のジョセフ、姉シャルロッテに次ぐ三番目の皇位継承者だった。

ある時、王室一族の耳に、騎馬部隊に生まれながら戦いを悲しみ、防護壁造営に専念しているという若者の噂が届いた。

「世は永らく戦乱の中にあるというのに、戦いそのものを悲しむとは、なかなか興味深い奴がいるな。」

国王が言った。誰しもが必ずしも戦いを好んでしている訳ではないが、他国からの攻撃がある以上、こちらも



立ち向かわねばならぬ。せめて大陸内だけでも統一国家を目指さねば、覇権争いは止まらない。しかしながら、長く続く戦争で国民は傷つき、命や田畑や家畜を失い、不幸になっている。国土も荒れ果てている。何のための戦争なのか……。その思いは、王家のあいだでもよく話し合われるものだった。

フレデリック王子は、ミハエル国王にこう申し出た。

「生まれながらにして戦いを運命づけられた者たちは、その多くが戦いを当たり前だと考えております。その中であって、戦いそのものを悲しむという若者がいるのなら、私は是非とも会ってみとうございます。その者を呼び寄せてはいただけませんか。」

「そうだな。その者がどのような人物か、余も興味がある。」

こうして、騎馬部隊のヴォルフは王室に呼び出されたのである。

ヴォルフの両親は、王家の呼び出しに驚き、息子の身を案じた。

「戦を悲しんでいる者と知られて、まさか祖国への忠誠心を疑われたのではあるまいな……。」

「行かせない訳にはいかないし……。でも、もしお手討ちにでもなったら……。」

しかし、ヴォルフは冷静だった。

「おそらく大丈夫かと思えます。もし、何らかのお疑いが生じたり、お怒りをかけていたりしているのであれば、直ぐさま兵が来て私を捕えて引き立てるはず。しかし、もしもの時は先立つ不孝をお許し下さい。」

ヴォルフは謁見室に赴いた。腰に差している剣の上に己が兜を抱えた左腕を置き、抜けぬように押さえる。これは王室に対する礼儀の一つだ。そうして待っていると、国王とフレデリック王子が入って来たので、彼は深く頭を垂れた。

「騎馬部隊・隊長ジークヴァルト・ペフラインの子ヴォルフ、お召しにより参上しました。」

「うむ。面をあげよ。余が国王ミハエルである。」

「は。」

ヴォルフは顔を上げた。目の前には、二人の人物が静かな表情を浮かべている。

もう一人が言葉をかけた。

「私は第二王子フレデリックだ。そなたを呼び出したのは、実は私だ。戦いを運命づけられた者たちの中で、それを悲しむ者がいると聞いて、会ってみたくなつてな。」

王子は、ヴォルフを見つめながら問うた。

「そなた、戦いの悲しみを如何にして解く？」

騎馬兵は答えた。

「戦いを止めることかと存じます。」

「では、如何にすれば、戦いを止めることができる？」

「こちらから攻め込むことを止めます。」

「それでも他国は攻めてくるが、それをどうする？」

「こちらからは領土を出ず、入って来た他国の軍勢を追い返すことのみを繰り返します。もしも、不運にも他国の兵が死んだら、その遺体を丁重に返します。」

さすれば、他国の者も我々と同じことをするようになるでしょう。それによって戦いは起きなくなります。」

「だが、それでも他国が攻めてきたら何とする？」

「同じです。我が国はひたすらに守り通し、こちらからは領土を出ず、他国を侵さない。そのうちに、相手国はきっと和睦を申し入れてきます。和睦まで何年かかるか、何十年かかるかは分かりません。しかし、戦いを終わら



せるには、その方法しかないかと。

いくら力でねじ伏せたところで、相手国の心から戦う意思を取り除くことのほうが、比べものにならぬほど強固な盾となりましょう。」

それが、彼が十五の時から三年間、考えに考え抜いた末の結論だった。

勿論これには国王の許可や国全体の同意が必要であり、一介の騎馬兵一人の手には負えぬ規模の話である。それを話すことすら危ぶまれるが、今まさにその国王の前であって話す機会に恵まれたのだ。たとえそれで命を落とそうとも、話さずにはいらなかった。

「なるほど・・・そなたはそういう結論に至ったか。」

ミヒヤエル国王は言った。この時ヴォルフは内心、己が死を覚悟した。だが、国王と王子の彼を見る目は優しく穏やかだった。

「それで、具体的には、これから如何にすれば防備を強くできる？」

国王が言った。

「は？」

ヴォルフは、てっきりその場で捉えられるかお手討ちになるものと決め込んでいたため、一瞬戸惑った。

「は？ではない。具体的な方策を尋ねておる。当然考えておるのであろう？」

その声は、穏やかで真剣なもののように思えた。

「はい。各地に遠くまで見渡せる見張りを立てておき、隣国の軍勢が見えたら、その進路に油を撒き、火を放ちます。兵たちは、火が燃えさかるのを見れば引き返すでしょう。私は騎馬兵ですから、馬が臆病な獣で炎を恐れることを知っております。道を変えても、同じことをします。その繰り返しです。」

「水攻めの時は何とする？」

「前もって海へと続く堀を巡らせておくのがよろしいかと。幅は馬の脚が地に届かぬ程度にして、街道には跳ね上げ橋をかけます。また、その堀の水は、田畑を潤すものともなりましょう。

そうして、各国との和睦が成し遂げられた時、人々は平和を享受し、国王陛下および祖国ナーデルを称えることと思われれます。

・・・申し訳ございません。甚だ身分不釣り合いで差し出がましいことを申しました。」

ヴォルフは、そこで話を止めた。

「良い良い。なかなか参考になる。・・・時に、そなた、余の傍近くに仕える気はないか？」

ヴォルフは驚いた。国王が懐深き王だとは聞いていたが、たかだか一兵卒に意見を求め、なおも傍らに置こうとするとは。やはり国王の国王たる器であろうか。

「私は国王陛下の臣下にございます。何なりとお申し付け下さい。

しかしながら、私は剣の腕は甚だ不確かな者。それでもよろしいのでしょうか？」

「余は、警護兵を求めているのではない。余と平和への願いを共有し、その大いなる理想のために進言してくれる参謀を求めているのである。

ヴォルフ・ペフライン、只今よりそなたを特命参与に任ずる。より一層の忠誠を尽くすよう。」

「はっ！身に余る光栄！祖国ナーデルと国王陛下の御為、全力を尽くすことをお約束致します！」

ヴォルフは深く頭を垂れた。この国王は、まさに命かけて仕えるに値する名君に違いない、と確信しながら。



四. 特命参与

ヴォルフは、傍に控えていた侍従に連れられて、衣装部屋に入った。

そこで、身につけていた鎧兜と軍刀を返納し、代わりに上質な官僚の衣服と繊細な象眼細工が施された模造ナイフとを渡された。文官が宮廷内で身につける自衛の武器は、謀反を疑われぬように、わざと丸く形づくられた銅製の模造ナイフのみと決められていたのだ。

侍従も、先ほどまでは騎兵でしかなかった者に対して、また特命参与という聞き慣れぬ役職に対して、どのような接し方をすればよいのか戸惑っている様子だったが、親切には扱ってくれた。

「私は侍従のヨハン・グラツェルと申します。ヴォルフ様の身の回りのお世話をするよう、国王陛下より仰せつかっております。ご用の向きがございましたら、お申し付け下さい。

お着替えが済みましたら、王族の方々のお部屋のすぐ下の階へのご案内致します。そのお部屋をお使い下さい。急なことで、まだ何もございませんが、必要なものは取り揃えます。」

「どうもありがとうございます。まさかこのようなことになるとは思っていませんでした。」

ヴォルフは、感謝の意を込めて素直に頭を下げた。この行為によって、侍従も幾分か安心したらしい。和やかな笑みを浮かべた。

「夕刻には、国王陛下や王族の方々、高級官僚の方々とのご会食がございます。私がお迎えに参りますので、それまでお寛ぎ下さいませように。只今お茶をお持ちいたします。」

侍従はそう言って下がっていった。

高級官僚用の少し豪華な部屋に、一人ぽつんと取り残されたヴォルフは、行きかがり上このようなことになった自分を不思議に思った。たしかに思いの丈を国王に話しきったのは幸いだが、よもや参与を仰せつかるとは。だが、任じられたからには、決してその期待を裏切るような結果にはすまい……。

彼が去った直後の謁見室では、国王が同席の者たちと話を続けていた。

「父上、あの者をいきなり重用してよろしいのですか？たしかにあの者の一族は代々仕えている家柄ではありますが、ここにいる皆すべてがあの方とは初対面のはず。」

第一王子ジョセフが言った。別にヴォルフに不審があったわけではないが、一兵卒をいきなり参与にするというのは異例中の異例だ。

「あの者、おそらく何年もかけて平和をどのようにして実現させるかを考え続けていたに違いない。そうでなければ、あのような策をすらすら話せる筈がない。

最初、フレデリックとのやり取りを聞くだけにしていたのだが、果たして具体策まで考えているのだろうかと思しに尋ねてみたところ、見事に有効と思われる策を次々と提案してくるではないか。余は、あの者をかなりな策士と見受けたのだ。

それ相応の力を与えて、やらせてやって大陸内が丸く収まれば、それでよし。何も成果が得られなければ、また一兵卒に戻せば良い。その場合は、あの者は命を助けて貰った恩義に報いようと、これまで以上の忠誠心を持った兵となろう。また他の者たちも彼のようになりたいたいと励むようになる。いずれにしても我が国は忠誠心溢れる臣下を数多く増やせるのだ。」

「人こそ宝、と申しますからね。」

フレデリックが言った。彼もまたヴォルフの中になんか深い信念のあるのを感じ取っていた。あの者はきっとやってくれる。



王族と、城に家族を呼び寄せて暮らすことを許された高級官僚が揃った中で、ヴォルフは国王直々に特命参与として紹介された。

「今後は、ヴォルフが退官するまで、余に次ぐ権限を与える。皆の者、可能な限り力を貸してやれ。特にフレデリック、お前が主となって口利きなどしていろいろと助けてやるがよい。

ヴォルフよ、そなたは各国との和睦を計り、平和を目指すのだ。やりたい政策があれば、まず余に話してみよ。余が良し悪しを判断した後にそなたの政策は実行される。

皆の者、それで良いな。」

会食のあいだ、各人は彼を確かめるためにいろいろ話しかけてきた。その都度、彼は自らの平和への思いと、初陣からずっと考え続けてきた方策などを話し尽くした。そうして、すべての質疑応答が終わった時には、人々はヴォルフが特命参与となるべき人物だと理解していた。

「君の家族には、事の顛末を説明しておいた。他に、とりあえず何か希望はあるかな？」

会食の後、フレデリック王子はヴォルフを自室に誘って尋ねた。王子は彼にワインを勧めたが、彼は下戸を理由に断った。

「フレデリック様、お心遣い誠にありがとうございます。家族にも知らせたいと思っておりましたが、急なことで、知らせられないことを案じておりました。」

ヴォルフは、胸をなで下ろした。

「それでは早速ですが、この国の地図、隣国の地図、筆記用具、各国の歴史書、堀の作り方の書物などを希望致します。そして、国王陛下におかれましては、三日間のご猶予をいただきたいと。」

「分かった。しかし、それだけの資料を読み砕くのに、わずか三日間で良いのか？」

「とりあえずのご猶予でございます。先ずは一刻も早く、隣国との国境沿いに堀を造り始めなくてはなりません。そうして平和への歩みを着実に進めつつ、私も様々な知識を学びます。必要な視察も行いとう存じます。」

「なるほどな。君の希望は父に伝えておく。

しかし、先ほどからずっと気になっていたのだが、君は一度も『敵国』とは言わず、専ら『隣国』という言葉を用いているな。それは意図しているものか？」

「はい。ご推察の通りでございます。今は『敵国』かも知れませぬが、和睦した後は『隣国』となります。私は、和睦した後のことを考えて、この言葉を用いているのです。

事実は、常日頃から使っている言葉の通りに動くものであるからです。」

フレデリック王子は唸った。事実は言葉の通りに動く……か。

確かに王族も貴族も、戦の間は、言葉遣いも荒くなっている。言葉遣いが荒くなっている間は、不思議に不運なことが多いような気がする。

人柄が言葉遣いに出てくるということもあるが、もしかしたらその逆、使っている言葉が事実を導く場合もあるのやも知れぬ。

この青年、やはり相当な知恵者か……。

三日間、ヴォルフは部屋に隠りっきりで書物と地図を眺め、時には何かを書き入れていった。騎兵部隊で巡った場所の他にも様々な戦略的要所が存在するようだ。



そうして、四日目の朝、彼は政策要綱と地図を携えて国王に謁見を求めた。

「たいへんお待たせいたしました。これが、当面の計画でございます。」

「待ちかねたぞ。」

国王はあちこちに線の引かれた地図を見つめた。

ヴォルフの説明によれば……。

まずは国王自らの意思として、隣国との戦闘を極力避ける方針を国の津々浦々まで、漏れなく国民に宣言する。特に、軍勢に対しては決して国境を越えぬように固く命じる。

また、国境から僅かに内側を、海岸の近くから幅五メートルに掘り進めて用水路となし、そこに竹林を作る。竹は成長が速く、根が丈夫で土手を補強する効果も期待できる。その葉はそこを駆け抜けようとする者を傷つけるにもかかわらず、それが防衛設備であるとは思われにくい。

さらに、山上から矢を放たれそうな場所(ヴォルフは手袋をはめた指で指した)には、池を作り、蓮を植える。

田畑はその内側、牧畜はさらにその内側、そして兵舎、一般国民の生活の場所、それらが城を取り囲む……。

「うむ。だいたいは頷ける。早速その通りにしよう。」

しかし、そなたは何故手袋をしておる？」

「はい。私が指し示した場所を、おそらく国王陛下もお触れになりましょう。その時に、私めの指の跡を陛下がお触れにならぬようにと存じまして。その政策要綱も地図も、私は素手では触れておりません。」

「ほほう、そこまで気を遣ってくれるか。」

「勿論でございます。」

国王は、その日のうちにヴォルフの提言を実行に移し、特に時を要する用水路の建設には直ぐさま着手するように手配した。他国からの攻撃はいつ何時から始まるか分からないからだ。

五. 国王の親書

ナーデルのミヒヤエル国王は、国内に隣国への侵攻は一切放棄し、防衛にのみ専念せよと通達を出した。

また、今年十二歳になる末子のパスカル王子に親書を持たせて、ラオブ・オープスト両国に向かわせた。パスカルは、王国内では少年ながら賢明なことで知られている。

少年は、一人で剣も持たず丸腰でラオブのウィンバル城の前まで来ると、門番に告げた。

「私は、ナーデルの王子でパスカルと申します。我が父・ミヒヤエルの親書を持って参りました。どうかエーベルハルト国王陛下にお取り次ぎ下さい。」

ラオブ国王エーベルハルトは、ナーデルの王子の訪問に驚いたが、それがまだ少年で一人であると聞くと、最上位の茶と菓子を出して丁重にもてなすように命じて、少年と面会した。彼は、父王からの親書を傍にいた侍従と思しき人物に渡し、侍従は、それを国王へ差し出す。親書には、こう書かかれていた。

ラオブ国王エーベルハルト陛下

貴国と我が国とは、永きにわたって互いに大陸における覇権と領土を争ってきたが、戦争というものは、国力の低下や国土の荒廃しか齎さぬ。我がナーデル王家の者たちは内心では



争いごとを止め、専ら国民の生活を豊かにすることを希求して参った。

そこで、今後は貴国が如何にされようとも、ナーデルの軍勢は決して貴国の領土内には足を踏み入れぬことをお約束する。只今、国境沿いに用水路を兼ねた堀を建設しているが、それもあくまでも防衛のため、またそれを越えぬようにするための目印である。どうかご理解下され。

思えば、貴殿とも即位以来ずっとお目にかかってはおらなんだ。いつの日か、我が国の平和への切望をお分かり頂ける日が来よう。その折には、是非とも貴殿を我が友と呼ばせていただければと願う。

なお、同様の親書をオープスト国王にもお送りすることにしておる。どうか我が思いをお酌み取りいただきたい。

ナーデル国王ミヒヤエル

「平和への切望、とな・・・。」

エーベルハルトは目を疑った。ナーデルやオープストとの覇権争いは、もう何代にもわたって繰り返されてきた。一体何が彼にこのような決断をさせたのだろうか・・・。

彼は、使者の少年に尋ねた。

「君は、我が国にどのような気持ちで入って来たのかな？君たちにとって、我が国は敵国。私の前にいて、怖くはないのか？」

「私は、ただ国のため民のために参上しております。現在、我が国では貴国のことを『隣国』と呼んでおります。隣国を訪れるのに、何を恐れることがありましようや、」

パスカルは、毅然とした態度で言った。国王は、この少年が甚だ聡明で、まさに王家の者に違いないと確信した。

「そうか・・・。親書は、確かにお受け取り申した。お返事は、後日必ず書かせていただくと、お父上にお伝え下され。・・・時に、パスカル王子、貴国には最近何が変化がおありなのか？これまで相争ってきた相手国にこのような親書を送ってくるからには、何かのきっかけがあって然るべきかと思うのだが。」

パスカルは答えた。

「実は、父は最近、平和への実現策を熱く説く者を特命参与としました。我が王家は、かねてより強く平和を望み続けております。故に、真に平和を実現させる者を参与としたものと思います。」

（王子はまだ少年であり、護衛の者もなく、武器も持ってはいない。・・・いざとなれば人質にしてもよい、とのご意志か。

しかし、ここで王子を人質にしては、後の世にラオプ国王は卑怯者よと蔑まれるやも知れぬ。今日のところはそのまま帰してやろう。）

エーベルハルト国王は、王子に礼儀正しく接し、その日のうちに少年を帰した。後日調べさせると、確かにナーデル国王にはパスカルという名の王子がおり、容姿も使いに来た者と酷似しているとのことだった。エーベルハルトは、ナーデル国王への親書を認めた。

ナーデル国王ミヒヤエル陛下

御親書は確かに拝見いたしました。



貴殿の平和への思い、私も信じていたいと存ずる。しかし、失礼ながら、臣下を納得させるに足る暫しのご猶予をいただきたい。

貴殿同様、私もオープストに平和を目指す旨の親書を認める所存。

ついては先ず、双方の国境にある『百合咲く丘』にて互いに文官を一人ずつ連れて面会しようではないか。日時は、八月一日の午前十時。

お待ちいたしておりますぞ。

ラオプ国王エーベルハルト

親書をナーデルに届けたのは、二十歳くらいの一人の女性だった。

ミヒヤエルは、パスカルがラオプで受けたのと同じように丁重にもてなした。彼女は、自らを王女クラリスと名乗った。

「父からは、くれぐれもよろしくとのことでした。」

と、彼女は言った。美しい唇からは王族に相応しい気品と聡明さに満ちた言葉しか出てこない。

「姫君御自らのお出まし、誠に有難く存ずる。この城にても、何処にも危険はございません。すぐにご帰国されとは存ずるが、どうかお心安らかにお過ごし下され。」

お父上とのご面談については、委細承知したとお伝え願いたい。」

「父からは、細やかながらパスカル王子に先日のご訪問のお礼に、その時と同じ菓子を預かってきております。どうぞお納めを。」

ミヒヤエルはその菓子をパスカルの部屋に届けさせたが、王子はその菓子を見て言った。

「これは、先日いただいた菓子ではありません。全く異なる物です。」

ミヒヤエルはクラリスに言った。

「先ほどいただいた菓子だが、愚息は先日とは異なると申しておるそうです。何かお間違いがございましたか？」

クラリスは、ミヒヤエルを見つめながら言った。

「ミヒヤエル国王陛下、ご無礼の段、何卒お許し下さい。父は少し疑り深いもので、先日ご訪問下さった方が王子様ご本人だったかどうかを確かめたかったようでございます。ですが、これにて疑いは晴れました。」

ミヒヤエルは微笑んだ。

「いや。お疑いはごもっともです。しかし、先日貴国に使わしたのは確かに我が息子でございます。」

「この度の親書は、新しく特命参与様を任命されたことが契機になったと伺いました。それは、どのような方なのでしょうか？」

ミヒヤエルは答えた。

「その者は、ヴォルフ・ペフラインと言いまして、元々は我が国に代々仕え、騎馬部隊を率いてきた一族の者です。」

戦い続けねばならぬ運命に生まれながら、戦いを悲しみ、幾年にもわたって平和への思いを実現させるための方法を考え続けてきたと聞いて、特命参与として召しかかえました。

現在は、私の傍近くで、そのための政策を立ててくれております。」

「堀もそのひとつなのですね。」

「そうです。しかし、堀とは言っても、むしろ用水路としての役割のほうがはるかに大きいものとなりましょう。そ



の者は既に、戦が収められた後のことを考えているのです。」

「そうでしたか。国王陛下、できましたらその特命参与様に会わせてはいただけませんか？私も会ってみたくりました。」

早速ヴォルフが呼び出され、彼は文官の服装でミハエル国王の傍らに控えた。国王と並んでクラリス王女と対面する形だ。

「私はラオプの王女クラリスです。特命参与様、貴方は戦いを悲しみと捉えられる方とか。何故そのような見方をされるようになったのですか？」

ヴォルフは答えた。

「私は騎馬部隊の一族に生まれ、幼い頃から武術を習い、十五歳の時から戦場に出ました。

しかし、その中で相手国の兵や私と同じ部隊の者たちが血を流し倒れていくのを間近にして、何故せつかくこの世に生まれてきている人々が傷つき、同じ『人』という存在によって命を断たれ、他者が作った『国』という実体のないもののために死ななければならないのかと切実に思うようになったのです。」

彼の目は悲しみと憂いとを思慮深く湛えていた。

「そうですか。『国』には、実体がありませんか。」

「はい。私には、そのように見えます。しかし、人々が暮らす場所、安心して生きていける環境というものは必要であり、それこそを『国』と呼ぶのではないのでしょうか。『国』は人々を幸せにするための手段に過ぎません。

どんなに大きく立派であっても、住む人がいなくなった家は、程なくして廃墟となり崩れ去り、あとには野原だけが残るのです。」

クラリス王女は、居城へ帰る道すがらずっと考えた。『国』とは、一体何であろうか、と。

広い麦畑が静かに夕焼けに赤く染まっていた。

六. 女王と花束

オープストのナターリア女王は、ナーデル国王からの親書を幾度も読み返していた。彼女は、両親を流行病で亡くして即位したばかりのまだ二十歳そこそこの女王である。

この親書に書かれている通りなら、長く続いている戦争も終わり、国土が兵によって踏み荒らされることも焼き払われることもなく、作物も滞りなく収穫されよう。それは我が国の国力向上にも繋がる。膨大な軍事費も必要がなくなる。良いこと尽くめなのは間違いない。

それに、親書を届けてきた少年は、どうやら間違いなくナーデルの王子本人らしい。国王の覚悟が見て取れようというものだ……。

「恐れながら、女王陛下、その内容が事実かどうかは、まだ疑わしゅうございます。」

女王の片腕であるゼバスチャン・ユング内務大臣が言った。

「ナーデルは、国境沿いに堀を巡らし始めております。堀は戦いのためにあるものかと。」

つい昨日、ナーデル国王とラオプ国王が直接対面するらしいとの情報が入ってきた。もし、この二つの国が和睦して、オープストに攻め込んでくるようなことにでもなったら、この小国はひとたまりもない。

「それでは、試してみよう。いつもより兵を減らし、怪我人が出ない程度にナーデル領内に攻め込む。相手が我が国に入り込まねば、この親書を信じよう。そうでなければ、この親書には返事を出さぬ。それで良いか？」

「御意。」



翌週、支度を調えたオープスト軍はナーデル領内に攻め込んだ。

しかし、その動きは、かねてから高台に配置されていた見張りによって、いち早くローベルク城に伝えられていた。既にその数時間前には、ジョセフ王子とヴォルフの兄・ディートリッヒが兵を率いて国境近くで待ち構えていたのである。

「良いか！我らは相手国の兵をただ領内から追い返すのみ！出来る限り傷を負わせることも避けよ！隣国の領土に一歩たりとも立ち入ることは許さん！立ち入った者は即刻切り捨てるから、その覚悟で臨め！」

王子は全軍に檄を飛ばした。ディートリッヒも馬上で剣を固く握りしめる。

(ヴォルフの奴、こんな面倒な戦い方を考えおって！…しかし、何故か心が軽い…。)

実を言えば、ヴォルフが堀の建設を海に近い場所から始めたのは、このオープストの動きをある程度見越していたからであった。オープストは三国の中で最も小さい国だ。常に他の二国の動きを恐れている。試みか、本気か、いずれにしろ、近日中に攻め込んでくるであろうと読んだのである。

オープスト軍のマーフィ大將は、国境に相手国の軍勢が既に陣形を整えて待ち構えているのを見て驚いた。

不意打ちのはずが、これでは話にならぬ。だが、女王陛下からは今回は相手国の意思を試してくれさえすればそれで良いと言われている。試してやるか！

「かかれー！」

彼は号令をかけた。

戦いは、王子に直接率いられたナーデルの軍勢のほうが圧倒的優位に立った。オープスト軍の兵は、隣国の領土に足を踏み入れることさえ出来ず、運良く踏み込めた者も、軽く手傷をつけられて撤退した。しかしながら、それでいて相手国の兵は国境を越えては来ない。こちらの兵を追い返すと、何事もないのに引き返していくのである。

と、一人の兵が矢に射貫かれて死んだとの連絡が入った。相手国領内に入った兵の一人が倒れたらしい。

慌てて駆けつけると、そこには相手国の兵も幾人か集まっていた。中でもかなり高い身分と思しき人物が、その矢を抜き、兵の胸の上に野原で摘んできたばかりらしい白い花を置いていた。彼はマーフィに向かって言った。

「誠に申し訳ない。できるだけ死なせるなと命じておいたのだが…。私はナーデルの王子ジョセフ。せめてもの詫びに、この花を手向けさせてもらいたい…。」

彼は兵の亡骸とマーフィたちに向かって頭を下げた。

一国の王子が、ただ一人の兵のために対戦国の兵たちに詫びるなど、それまではおよそ考えられぬことである。マーフィたちはその姿に心打たれた。

「…どうぞお顔をお上げ下さい、王子。貴方のお優しいお気持ちは、我らにもよく伝わります。帰ったら、そのお心を我が主君にも必ずお伝えいたしましょう。」

オープスト軍は、そのまま退却していった。

ナターリア女王は、マーフィたちから報告を受けて、ナーデルの親書の内容が本当らしいと判断した。

「私も、ナーデルの国王にお会いしてみよう。まず相手を知らなければ。」

ナターリアは、ナーデルに親書を送った。国王に直接会いたいと伝え、国境近くのオープスト領ヘルフリヒ市内にあるイッテンバッハ伯爵家の中庭を指定した。双方とも供は一名ずつ、日時は六月十八日の午前十一時、との条件で。



ナターリアは、ナーデルとラオプ両国が接触する前に、ナーデル国王に会わねばならぬと考えたのである。

かくして、オープスト領内にあるイッテンバッハ家の中庭テラスで、ナーデルのミヒヤエル国王とナターリア女王との面談が行われた。伯爵家の中庭だけあって、そこはよく手入れがなされ、人の腰ほどの高さに切り揃えられた様々な色の薔薇が溢れんばかりに咲き誇っている。ナターリアにはゼバスチャン國務大臣が、ナーデル国王にはジョセフ王子が付き添った。

「お招きにより参上した。私がナーデル国王ミヒヤエルです。これは、我が子ジョセフ。」

「お初にお目にかかります。当地の国王、ナターリアと申します。この度は、わざわざのお運び、誠に恐縮に存じます。それに控えておりますのは内務大臣のゼバスチャンでございます。」

両国の国王同士の話し合いは、終始和やかな雰囲気が続いた。ナターリアは、相手国領内に息子とだけ来た隣国の国王の堂々たる振る舞いに感動さえ覚えていた。それに、傍らで静かに話に聞き入る若き王子も、好ましい人物のように思える。ゼバスチャンもまた主君と同じ印象を持った。

「時にミヒヤエル国王陛下、誠に失礼ながら、この度のご親書の内容は本当なのでしょうか？最近わが国との国境近くに堀を作られているとも聞いており、ご親書の内容をにわかには信じられないという臣下もおります。本日ここに来て下さったことは有難く存じますが、その他にも我が臣下を納得させられるだけの証が欲しゅうございます。」

若き女王は、国を守るために必死だった。ゼバスチャンは、主君の国を思う心を改めて知り、それをいじらしく思った。

(あの幼かった姫様が、今は祖国を守るために堂々たる隣国の国王と対等に話し合っておられる。我がご主君ながら、なんとご立派に成長あそばされたことか……。)

ミヒヤエルの彼女を見る眼差しもまた優しく静かだった。

「ご懸念はごもっともです。それでは私が何故この時期に堀を巡らせ、また親書をお送りしたか、その理由をお話ししましょう。」

かねてより、我が国は戦による国領内の諸々の禍を無くすことを祈念して参った。しかし、なかなかその機会に恵まれなんだ。

そこへ、騎馬部隊の家系に生まれながらも戦いを悲しみ憂う若者があると聞き及びました。私はその者の平和への思いに賛同し、特命参与に取り立てました。今回のことも、その者の発案により、私自身の意思として実施したもの。

まず堀ですが、あれは我が軍勢が国境を越えぬようにする目印であると同時に、農業用の用水路になる予定で造らせているものです。程なくしてその一部に池ができ、そこに美しき蓮の花が咲くのをご覧になることでしょう。

そして、親書はその内容の通り、我が軍勢が国境を越えぬということを隣国に宣言するもので、他意はありません。それを書いたのも、やはり特命参与を採用したことがきっかけです。その者はすでに貴国との和睦がなされた後のことを夢見ているのです。

何卒我が心をお汲み取りいただきたい。」

やがて、話し合いが終わろうとすると見たジョセフは、挿していた剣を鞘ごと抜いて脇の荷物台に置き、代わりに同じ台に置いていた花束を取って、ナターリアの前のテーブルの上にゆっくりと差し出した。

「これは、先日の戦いの折、我が方の手落ちにて命を落とされた方のために持って参りました。そのご家族にお渡しいただければと存じます。」



ミヒヤエルとジョセフが去った後、ナターリアはゼバスチャンに花束を預けた。

「これは明らかに追悼のために作られた花束でございます。」

ゼバスチャンは言った。花束は、白い菊を基調にして青い花があしらわれ、それに若葉を加えて丁寧に設えられていた。

「この花束こそが何よりの証……そう思いませんか、ゼバスチャン。白い菊と青い花はまさしく哀悼の意を表し、それらを引き立てている若葉は我が国の繁栄を願う御心の象徴。この場において我が国に贈られるものは、これ以外のものではいけなかったのです。」

ナターリアには、その花束に込められた意味が十分に伝わっていた。周りから咽び泣く声が聞こえる。実は、周りには数人の武装兵が潜ませてあったのだ。

「ヴォルフ、喜べ。オープストから和睦を申し入れてきたぞ。」

数日後、ミヒヤエルが言った。

「それはよろしゅうございました。オープストの女王陛下に会いに行かれた甲斐がございましたね。」

「うむ。そなたが用意してくれたあの花束もたいぶ効いたらしい。礼を申すぞ。」

ナターリアが武装兵を潜ませていたのと同じように、ミヒヤエルもまた必ずしも不用意に他国に足を踏み入れた訳ではなかった。会談が行われた伯爵家は、ナーデルとも親交があり、武装兵が配置されていたことも、また会談後の様子も、密かに知らせてくれていたのだ。

「勿体のうございます。しかしながら、それは国王陛下とジョセフ様のご功績と存じます。」

「そなたは謙虚な男よ。初い奴だ。来たるエーベルハルト国王陛下とも心が通じ合えれば良いが。」

「国王陛下なら、きっと成功なさいます。私めも信じております。」

七. 進言

七月、針葉樹林に覆われているナーデルは、緑の鮮やかさが増して、人々の心も浮き立つ。

その中で一人、ジョセフだけが何故かずっとふさぎ込んでいた。母親のオリーヴィア妃に話しかけられても、生返事ばかりでまるでうわの空だ。

「ジョセフ、そなた何かあったのか？ここしばらく少しの笑みも見せていないではないか。父に話してみよ。」

息子の異変を見かねたミヒヤエルが、夕食後二人きりになったのを見計らって問い詰めた。

「実は オープストのユング内務大臣から、内々にお便りをいただきまして。ナターリア女王が近頃塞ぎ込んでおられるので、理由を尋ねたところ、私の顔が浮かんで消えぬと。思うに、これは貴方に恋をしてしまったのかもしれないと書いてあったのです。」

私は、ナーデルを継ぐ者。他国の女王と恋をすることはできません。」

ジョセフはそこで言葉を切って俯いた。

「……それで？」

父王は息子の思いがけぬ報告に動揺しながらも、平静を装って再び問うた。

「ですから、これから何かの折には顔を合わせるであろう女王陛下にどう接していこうかと悩んでいるのです。」

少しの静けさがあった。父は、息子に言った。

「そなたにも、ご婦人に対する時に男としてどう行動すべきかを常に言ってきた筈だがな……。とにかく女王陛下と直接お話してみろ。今のところは、内務大臣の推測に過ぎぬように聞こえるがな。」



そして、もし女王陛下のお気持ちがそなたに傾いていて、なおかつそなたも添い遂げようと思うようであれば、はっきりそう言え。中途半端が最も恥ずべき行為だ。ご婦人に対して失礼にあたる。特に相手は女王陛下なのだぞ。」

「しかし、父上！」

「それとも、そなた、ナターリア陛下では不足か？」

「め、滅相ありません！女王陛下は、お美しく、必死なご様子が放ってはおけないというか……。」

ジョセフはなおも何か言おうとしたが、咄嗟には言葉が思い浮かばない。彼が言い淀んでいる間に、父王はナターリア女王への招待状を書き始めていた。

オープスト国王ナターリア陛下

先日は、直接お目にかかることができ、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。またこの度は、両国和睦の運びとなり、感涙を禁じ得ませぬ。

ついでに、両国間の平和条約を締結いたしたく、我が国領内の国境近くにあるベーレンドルフ伯爵家の中庭にて、女王陛下をお招きいたしたく存ずる。そしてもし可能であれば、そのまま三日ほどご滞在いただき、ゆくりと我が一族や国土のことをご覧くださると嬉しく思います。

貴国はもはや我が国の友好国と考えます故、武装兵も幾人かお連れ下されても構いませぬ。ご都合の良い日時を教えてください。

ナーデル国王ミヒヤエル

翌朝この話をミヒヤエルから聞いたヴォルフは、想定外の話にしばらく考え込んで、やがてやおら椅子から立ち上がり、国王の前に跪いた。

「ヴォルフ、如何した？」

「これより、甚だしくご無礼なお話を致します。途中で陛下のお怒りをかう可能性も考えられますが、どうか話の最後までお聞き届けいただきとう存じます。」

彼は二つの策を提示した。

一つは、ジョセフ王子と女王とが結婚には至らなかった場合……これまでの和睦政策の通りに平和条約を締結して、交流を重ねながら、両国がそのまま存続していく。

もう一つは、その二人が結婚したいと希望した場合……ラオプ国王の承認を得た上で、二人を結婚させ、二つの国を一つにする。その際は、王位継承者をナターリア女王に定め直して、国の名を変更、首都もオープストの王都フロイデに定める……

「待て！何故王位継承者をナターリア女王に代えるのだ？それに、国名と首都も変えるだと？そなた、祖国を何と心得る！」

さしものミヒヤエルも、この提案には憤りを見せた。それではナーデル側にとって家名断絶に等しいではないか！国王は内心、あわよくばオープストを併合してしまおうと考えていたのである。

「お怒りはごもっともでございます。臣下の分際で、王位の如何について触れることがいかに無礼で身分不相応なことかは、よく分かっております。

しかしながら、もしお二人がご結婚あそばされ、そのままジョセフ様が国王となられた時、オープストの国民はどう思うでしょうか。おそらく『ナーデルは女王を籠絡して我々から領土を奪い取った』『政略結婚だ』と感じるに違いありません。それでは国民の心に火種が生まれてしまいます。最悪の場合、内乱も起きるかもしれませ



ん。

ここで、次の国王がオープストの女王陛下に定められれば、オープストの民は、ナーデルを自分たちと同じ君主を仰ぐのだと認めることになります。国名と首都を変えるのも、同様の理由です。

先日、クラリス様にも申し上げたように、国とは人々が幸せに暮らすためにあるもので実体がない物でございます。人々の心が一つになって初めて国が成り立つのです。人の心を踏みにじるようなことがあれば、それはもはや国ではありません。

そもそも第一に考えるべきは、ジョセフ様と女王陛下のお気持ちでございます。ご結婚は、あくまでもお二人のお気持ちから望まれたものでなければなりません。ジョセフ様がもし本当に女王陛下をお思いになるのであれば、王位が女王陛下に移ることなど、何とも思われぬ筈でございます。

また、お二人のあいだに生まれるお子様は、ナーデルとオープスト双方のご血統を引き継ぎます。ナーデル王家の血は、新しき国の中に存続していくのです。

また、ラオプ国王のご承認も取らねばなりません。その際、決してナーデルがオープストを併合したと思われてはならないのでございます。

国王陛下におかれましては、何卒ご再考のほどを……。

私は今日、甚だしくご無礼なことを幾つも陛下に申し上げてしまいました。これよりしばらくのあいだ、自室にて謹慎致します。」

ヴォルフは、そのまま下がった。

その日から五日間、ヴォルフは要人が顔を揃える週二回の晩餐の席に姿を見せなかった。彼は一般兵と同じ食事を部屋に運ばせて、部屋に隠っていたのだ。

「最近、ヴォルフは顔を見せませんね。風邪でも引いたのでしょうか。」

王族のみの時にアンネリーゼが尋ねた。ヴォルフが元来持っている聡明さと穏やかな話しぶりに加え、オープストと和睦が首尾良く進んでいることで、今では、王家の誰もが彼を信頼し、気にかけるようになっていた。

ミヒヤエルがヴォルフが謹慎した経緯を話すと、皆は一様に驚いてジョセフを見た。ジョセフは、ヴォルフが自分の意志を尊重してくれたのだと理解した。

「とにかく、今一度女王陛下にお会いしてみましよう。ヴォルフは、私が結婚してもしなくても、どちらでも良いように二通りの案を立ててくれたのです。まだ恋愛というものを経験してはおりませんが、確かにヴォルフの申す通りです。私も本当に恋をするのなら、王冠を捨てても悔いのない、そんな恋をしとうございます。」

彼は言った。フレデリックは、冷静沈着な兄の口からそのような情熱的な言葉が飛び出したことは意外だったが、男たる者そうでなければならぬとも思うのだった。

「ただ、再会の折には母上やシャルロッテ、フレデリックにもしてもらったほうが良いかもしれません。」

「何故だ？」

「ナターリア女王陛下におかれましては、ご家族をすべて病で失ったばかりと聞いております。ご婦人方はご婦人方同士、親しくなっていたほうがよろしいでしょうし、私とフレデリックが同時にいれば、女王陛下にも二人を見比べる機会ができます。それによって、お気持ちをはっきりさせることがより容易になるかと。私もまた同じです。恋愛の相手として見るのと、そうでないのとは雲泥の差。それを見極めたいのです。

ヴォルフは、私を尊重して、実によく考慮してくれたと思います。」

ミヒヤエルは、息子の言葉を聞いて、一時でもヴォルフに対して声を荒げてしまったことを悔いた。

そうか、余は、ジョセフと女王の幸せに思い至るより先に、二つの国が一つになれば、などと思ってしまったのだ。二国の併合を考え出してから余は、いつの間にかジョセフの父親、平和を希求する国王ではなく、人を



チェスの駒の如く扱う欲深き征服者に成り下がっていった……。

翌朝、ミハエルはヴォルフが隠れている階下の部屋を訪ねた。ヴォルフは、国王が自ら臣下の部屋まで出向いてきたことに戸惑ったようである。

「国王陛下！わざわざお越しくださらずとも、呼びつけて下されば参りますのに。」

「いや、先日はつい怒鳴りつけてしまった故、謝ろうと思うてな。余は、ジョセフの心のあるのを忘れて、あらぬ考えをしていた。そなたは、そのことを言いたかったのではないか。申し訳なかった。引き続き、特命参与の務めを果たしてくれ。頼む！」

ミハエルは、ヴォルフに頭を下げた。

「こ、国王陛下！おやめください！このようなところを他の者が見たら動揺いたします。臣下の部屋ではございますが、どうか早く中へ！」

ヴォルフがそう言って国王を中に案内しようとした時、他にも三つの人影が扉の内側に飛び込んできた。ジョセフとフレデリック、それにシャルロッテだった。

「そなた達……！」

驚く父と参与とに向かって、ジョセフが口を開いた。

「父上、この度のことは、もとはと言えば私の問題ではありませんか。私も話に加えていただかねば。」

フレデリックは、こう言った。

「ヴォルフは、もともと私が呼び出した者。彼については、私こそが責任を負うのです。」

シャルロッテも黙ってはいない。

「何事も殿方のみで決まるものではありません。女にとって、恋愛は運命を変え、結婚は時には生死を分けるほどのもの。殿方には、やはりお分かりにはなりませんまい。」

実は、私からも提案がございます。今度は私がナターリア女王陛下の元に行って、しばらく女王陛下の人となりを見てくるのです。今のところ、オープストの内部がどのような雰囲気なのか、全く分からないではありませんか。私ならば、オープストの方々も心を開いてくれるかもしれません。ナターリア女王陛下とも、親しくなれるかもしれないのです。また、女王陛下が、ナーデルの地を治めるに足る方かどうか、私が見極めて参ります。」

この案には、ミハエルもヴォルフも驚愕した。

「シャルロッテ！そなた……！」

「シャルロッテ様……。」

彼女は、悪戯っぽい笑みを浮かべてヴォルフに言った。

「大切なのは人の心。心こそが最強の盾……ずっとそうやってきたのは、他ならぬそなたですよ、ヴォルフ。」

八. ナターリア

ナターリアは、ミハエルからの二度目の親書を読んで吐息を漏らした。

「ご招待は嬉しいけれど、ジョセフ様とも顔を合わせなければなりませんね……。」

彼女は、ゼバスチャンが密かにジョセフ王子に手紙を送ったことを知らない。今、傍らには、ヨハン・フォーゲル外務大臣がついている。

「誠に失礼ながら、女王陛下におかれましては、ナーデルの王子様をお気にかけているのでしょうか？」

女王は悩んでいた。あのもの静かで聡明そうな王子……彼女の心は、彼のことでいっぱいだった。公務に打ち込んでいる時は良い。だがそれ以外のプライベートな時間……食事や散策の時間などには、決まって彼の顔が



浮かんでくる。ことに、就寝前が怖かった。

「ジョセフ様…貴方に会いたい…。でも、貴方にどんなふうに接したらいいのですか…？」

平和条約締結の日がやって来た。ナターリア率いるオープストの平和訪問団は、国境を越えてナーデル領内に入った。国境を越えた所ではジョセフとフレデリックが数人の文官を従えて迎えに来ていた。ジョセフが弟を紹介した。

「女王陛下、誠に僭越ながらお迎えに参りました。これは弟のフレデリックです。」

「お初にお目にかかります。フレデリックと申します。」

ナターリアは思った。(この間お使いにみえたパスカル王子の他にも、年の近い弟君がいらしたのね。確かに似ておられる。でも、ジョセフ様のほうにより強い親しみを感じる。この気持ちは、やはり…。)

彼女に随行している外務大臣のヨハンは、これまた内密にゼバスチャン内務大臣から、女王がどうやらジョセフ王子に心を寄せ始めているらしい、と聞いていた。

(女王陛下の眼差しは、通常ではない…。女王陛下がジョセフ王子を親しく思っておられるというのは、まんざらゼバスチャン殿の思い違いでもなさそうだ。だが、それでは我が国はどうなるのだ？お二人がご結婚あそばれて併合か？まさか、な…。)

その道すがら、蓮の花を一面に湛えた池と、畑や牧草地に水を送っている用水路とが見えた。

「この蓮の花のなんと清楚なこと。平和そのものですな。それに、これは良くできた用水路でございますね。」

ヨハンの言葉に、フレデリックが応える。

「我が国では、蓮は花を愛でる他にも、その種は菓子などに入れ、その根も煮て食用に致します。」

「ほう。食用でございますか。」

二人の王子の案内で、ナターリアたちがベーデンドルフ伯爵家の中に入っていくと、玄関広間にミヒャエルとオーヴィアをはじめ数人の姿があった。

「お待ちしておりました。これらは我が一族の者たちです。ジョセフとフレデリック、パスカルは改めてご紹介するまでもありませんな。」

ナターリアはジョセフを熱く見つめ、ジョセフのほうも、彼女を前とは異なる目で見ている。もしこの人が他国の女王ではなく、自国民であったなら、本当にどんな存在に思えるのだろうか…。

「そして、我が妃オーヴィア、我が子シャルロッテ、アンネリーゼ。これで王家は全員です。あとは、外務大臣ハンス・ターメルハイト。」

ナターリアは、女性たちとハグし、儀礼的な挨拶を交わした。実は少し離れた場所からヴォルフもその様子を見ていたのだが、王族と大臣たちに遠慮して遠くから見届けるに留めていたのである。

訪問団の一行は、まず滞在する部屋に案内されて、一時間ほど休んだ。最上の茶と菓子が出て、案内してきたジョセフが言った。

「これが、先ほど話題に出た蓮の実を使った菓子です。美味しいですよ。それでは、私がお毒味を。」

彼は、大皿に盛られた菓子の一つを無造作に取り、口に放り込んで、そのまま部屋を出て行った。

「気さくな方ね。」

ナターリアは、ますます好感を持った。あの方は、あれが自然体に違いない、と。

伯爵家の中庭は、一面が緑の芝生に覆われており、およそ五十メートル四方には人っ子一人も隠れるところがなかった。そこに、屋根だけのテントが組まれ、白いテーブルクロスが眩いばかりの豪華な席が設けられてい



た。

そしてそこで、平和条約の内容を取り決め、それを二通作り、互いに署名した。
「これにて、貴国と我が国とは不可侵にして交易も拡大。親しき隣国となり申した。どうかよろしくお願いいた
す。」

ミヒヤエルが手を差し出す。

「こちらこそ、よろしくお願い致します。このような機会を与えて頂いたこと、誠に喜ばしく、感謝申し上げます。」
ナターリアが握り返す。

ミヒヤエルは娘を貴国にしばらくお預かりいただきたいと言った。

「我が子シャルロツテが申しますには、これからは貴国とお付き合いしていくにあたり、是非とも女王陛下や貴
国の風土のことなどを知りたいと。私も、その必要を感じております。神経細やかな女性のほうが、こういうこと
には向いております。ひと月ほど如何ですか？」

「では、そちらの姫君を我が国に？」

ヨハンが尋ねた。大きな国が小さな国に姫君を預けるというのか……。

「左様。すでにそのつもりで馬なども用意させております。娘は、可能であれば、女王陛下ともお近づきになりた
い、などと厚かましいことを申しておりますが。」

それから三日間、オープストの一行は、ナーデル領内の景勝地や畑や牧場などに案内された。特に、ジョセフ
とフレデリックはよくナターリアと話をする機会を増やして、できうる限り自分たちをよく知ってもらおうとしていた
し、ナターリアのほうでもそれは同じだった。

「ご家族がたくさんいらして、本当に羨ましいですわ、」

ナターリアは言った。

ところが、三日後の朝、事態は急展開した。

「ジョセフ様、私……貴方とはもっとお話したいと思っていますの。」

ナターリアが、伯爵家の廊下に一人でいるジョセフを見つけて、自ら駆け寄って話しかけたのだ。彼は、女王
の突然の告白に少したじろぐ様子を見せた。

「女王陛下、私と話してどうなるのです？ 私はこの国を継がねばならぬ身。それでもよろしいのですか？ ……他
の方、例えば貴国の方ではいけないのですか？」

ナターリアは、顔を赤らめながら、それでもはっきり言った。

「私はまだあまり対等な立場の人とお話をしたことがありません。初めは、王室の方々とのお話に慣れていない
せいだと考えていました。でも、あの日から貴方のお顔だけがずっと消えず、また国王陛下やフレデリック様の
前にいるときは何でもないので、貴方とお話するときには、貴方を見つめてしまい、言葉が出てこなくなるので
す。……ずっとお側にいたいのです……。」

ナターリアはジョセフの胸に飛び込んだ。背中に手を回して全身で彼の暖かさを感じ取った。それはもはや、
恋以外の何物でもなかった。

「女王陛下……。」

その時、ジョセフの中でそれまで押さえつけられていた何かのはじけた。彼女をきつく抱きしめて、柔らかな髪
を愛おしく撫でる。彼女の仕草、話し方、立ち居振る舞いの全てが、この数日の内に彼にも心惹かれるものにな
っていたのである。

「私も、ありのままの貴女に触れてみたくなりました。もし貴女が女王でなかったら、私は直ぐさま貴女を我が妃



とするでしょう。しかし、現実には困難です。一緒に乗り越えてくれますか、…ナターリア。」

長い説得が続いた。ヨハンも結局は二人と一緒に帰国することに同意した。

「女王陛下、陛下はわかりやすいお方ですね。薄々は気づいておりました。ゼバスチャン殿からも伺っておりました…。

ですが、ジョセフ様はナーデルを継ぐお方。なかなか難しいかと。」

外務大臣は、初め渋い顔をした。しかし、ミヒヤエルは穏やかに言った。

「実は、貴国の内務大臣殿からもお便りを受け取って、愚息も悩んできておましてな。それを聞いた我が臣下がこのようなことを想定して、すでに策を立てておりました。私も、よもやとは思っていたが、二人の心はすでに決まったようです。今こそ、その策をお話ししよう。」

ミヒヤエルは、ヴォルフの考えをそのまま話した。

「…つまり、オープストと共に、ナーデルをもナターリア女王陛下に治めていただく、ということです。その準備が整った後、私はナーデルの地を女王陛下にお譲りして退位し、我が一族は三つに分かれて、それぞれ公爵家として引き続き当地を治めさせていただく。それが我が方からの唯一の条件になりますかな。

我々がここまでやるのは、あくまでも二人の愛と、両国の平和のため。どうかお聞き届け下され。」

この提案には、ナターリアもヨハンも相当驚いたようで、違う角度から幾度も質問を繰り返したが、ミヒヤエルの答えは終始一貫しており、嘘も矛盾もないように思われた。

ヨハンは国王の熱意にも負けた。

「分かりました。それでは、今日このままジョセフ様をオープストの地にお連れ致します。もし、お二方のご希望に反して国内にて反対意見が賛成を上回るようなことがあれば、ジョセフ様をお返しに上がります。婚儀のことについては、決まり次第お知らせ致します。」

オープストの訪問団は、シャルロッテの代わりにジョセフを加えて、一日遅れで出立していった。

「時期は相当早まったが、そなたの進言通りになりそうだな。さて、これからが正念場かもしれぬぞ、ヴォルフ。」

訪問団を見送ったミヒヤエルが隣に立ったヴォルフに向かって言った。

「御意。あとはラオプの出方にかかっています。」

しかし、国王陛下、本当にすぐに譲位されるお覚悟なのですか？私めは、何十年か先を想定しておりましたものを。」

ヴォルフは、本当に『将来』の話として考えていたに過ぎなかったのだ。国王はにっこり笑って言った。

「ヴォルフよ、我が子に後を任せるに、何故に時を待つ必要があるだろうか。余は、ジョセフの父、真の国王たり得たいのだ。」

九. 百合咲く丘

ナーデルから帰国したナターリアは、早々に政府要人を召集して、ナーデルでの出来事、即ちジョセフ王子との結婚と両国統一の話が出たことについて理解を求め、協議を行った。自国が大きくなること自体に反対する者はなく、現在のナーデル国王とその一族の扱いについての議論が少しあった。他国の国王を公爵とすることには無理があるというのである。

「ミヒヤエル陛下は慈悲深き名君と謳われ、ナーデルの国民から大変慕われているようでございます。その方を公爵などに降下させてしまうのは、如何なものかと。それに、女王陛下にとっては義理のお父上になられま



